南蛮の風紀行－28. 近世の扉を開いた男

「早起きは三文の徳」と言われていますが本当ですね。いつものように早朝ウオーキングでセビリアの大聖堂の前を通りかかったところ、大きな扉が半開きになっていて人が出入りしています。そこでわたしたちも中に入ってひと通り中を見て回りました。見終わって満足したことになって、係員が今からミサが始まるので信者以外は外に出るようにと言ってきたのです。おかげで正規の入場料の８ユーロを払わずに済んだことも徳したわけですが、ミサが終わってまた観光客に開放される頃には、大聖堂の周りを取り囲むようにして行列ができていました。

有名と言えばあまりにも有名なコロンブスですが、それでもジェノバ出身の貴族でもない男の棺を王たちが担いでいるというこの墓は、当時のイベリア半島の、というより欧州キリスト教国におけるコロンブスの偉業の大きさを雄弁に物語っています。

イベリア半島の各地で見られるように、ここの大聖堂もまた、イスラムの文化と技術を色濃く残す建物です。しかし、わたしの目を奪ったのは何より、あのコロンブスの墓（棺）でした。何と１６世紀初頭のイベリア半島に権勢を誇ったカスティーリャ、レオン、アラゴン、ナバーラ王国のそれぞれの王が、コロンブスの棺を担いでいるのです。バルセロナのあランブラス通りからコロンブス通りを渡ったところに鎮座していた、あのコロンブスの像以上にわたしを驚かせてくれました。

古代、中世、近世、近代というように時代を分けることはよく知られていることですが、ではそれぞれの境目はいつなのかと問われると、所説入り乱れて模糊としてしまいます。中世ヨーロッパの最も大きなイベントは数次にわたった十字軍遠征であり、やがてイタリアにルネサンスが開花して、近世に移行していくというのが分かりやすいプロセスなのでしょう。しかし、それとてはっきりここからとか、はっきり誰からとかはなかなか教えてくれません。レコンキスタ運動でさえ見ようによっては１８世紀まで続いていたともいえるのですから。

ならばということで、わたしが独断と偏見で中世と近世に一線を画すならば、近世は大航海時代の幕開けとともに始まるというのはどうでしょう。つまり、それまでの地中海世界から一挙に大西洋・インド洋・太平洋と世界が拡大したときに近世が始まったという事

大聖堂の隣のインディアス古文書館で、大航海時代の古文書や古地図を展示していました。当時の外洋船の構造が分かりやすいように喫水より下も描かれています。

です。そして、それだからこそ、わたしが個人的には好きにはなれないコロンブスでったとしても近世への扉を開いた立役者として、彼を認めざるを得ないのです。

あのポルトガル王国に莫大な富をもたらしたバスコ・ダ・ガマが交易品を満載してリスボンに戻ってきたのが１４９９年です。新大陸を見つけた真の功労者であることから、その新大陸を彼の名前にちなんで呼ぶようになったアメリゴ・ベスブッチが新大陸（今の中米）に到達したのは１４９９年です。ブラジルを発見したという名誉を与えられているペドロ・アルヴァレス・カブラルが南米に到達したのも１５００年でした。

それに対してコロンブス（ジェノバ生まれのイタリア人ですからイタリア人の呼び方にならえばクリストバル・コロンボ）は１４９２年に大西洋を横断し、西インド諸島（コロンブス自身はインドと確信していたようですが)を発見し１４９３年に帰ってきたのです。彼が西の方にあると信じていたインドを目指して出港したのは、現在で言うとセビリア県の隣の県ウエルバの外港であるパロス・デ・ラ・フロンテーラでした。セビリアでもコリア・デル・リオでも、その外港であるサン・ルーカル・デ・バラメダでもありませんでした。そんなことはあまり問題ではありません。中世の交易のための港が全て地中海沿岸であったのに対して、彼はすぐそばとはいえジブラルタルの外、つまり大西洋に直接面した港から出発したのですから、わたしも彼を（嫌々ながらも）近世の扉を押しあけた人物だとしないわけにはいかないのです。

その当時、イベリア半島こそレコンキスタが収束して、イスラム勢を駆逐したとはいえ、バレンシアやカタルーニアの眼前に広がる地中海はまだキリスト教徒が制海権を握っている状況ではありませんでした。統一がなって国力を蓄えたいスペインにとって、制海権を持っていないということは、通商・貿易そのものが不可能ということです。

東がだめなら、西があるさとばかり、コロンブスは大西洋に航路を開き、ほとんどが略奪したものとはいえ、大量の交易品と奴隷を

大聖堂の外観はイスラム様式を色濃く残すアンダルシア様式ともいうべきもので、壮大で美しい。バチカンのサン・ピエトロ大聖堂、ロンドンのセイント・ポール大聖堂に次いで世界三大大聖堂の一つと言われています。

満載して帰ってきたのです。ポルトガルのエンリケ航海王子による航海学校や、まさに五里霧中の手さぐりによる航路開拓などの準備期間があったとはいえ、スペインにとって直接、それも莫大な交易と軍事上の利益をもたらしたのは、このジェノバ生まれの大山師だったのです。他国人であろうとなかろうと、胡散臭い山師であろうとなかろうと、国の恩人として、これ以上はないというほどの名誉で彼を遇したのも、それだけ彼がスペインにもたらした物が大きかったということです。